

大阪国際工科専門職大学における英語教育の報告

李 春美^{† a)}

A Report on the Philosophy and Current Status of English Language Education at International Professional University of Technology in Osaka

Choonmi LEE^{† a)}

あらまし 4年間の英語教育を通して、「未来を創るデジタル人材」を育成するため、開学前から英語教員が取り組まなければならなかったいくつかの問題点とその対処法を詳述した。さらに、TOEIC[®] テストのスコア変化から2年間の英語教育の効果を検証することによって、本学学生の英語レベルの底上げを責務として提示した。

キーワード 英語教育, 自律的学習, eラーニング

Abstract In order to develop 'digital human resources who will create the future' through four years of English language education, this report details some of the issues that English teachers had to address and how they dealt with them in the first two years and examines changes in TOEIC[®] test scores to measure the effectiveness of two years of English language education. The report recognizes that we have to try harder to raise most students' English levels so that they have a practical command of English.

Keywords English education, autonomous learning, e-learning

1. まえがき

本学が育成を目指す「未来を創るデジタル人材」は、アジア諸国との近接性を強みにする関西の産業界において、国際的に活躍できる英語による発信力を学生に求めることから、本学における英語学習は4年間を通じて行われる。

この報告は、いかに英語教育を展開していくべきかという問題を、開学前の取り組みから2年間の実践までを振り返ることによって、完成年度までの今後の2年間の英語教育への取り組みへの提言とするものである。

2. 開学から2年間の英語教育

本学のシラバスによると、1年次で学生が履修する英語コミュニケーション Ia と Ib は、リスニングやスピーキングなどの実践的英語活用能力の育成に焦点を当て、2年次前期の英語コミュニケーション IIa は、科学分野における専門的知識の理解を深めることを目標としている。そして、2年次後期の英語コミュニケーション IIb から、3年次の英語コミュニケーション IIIab までは、ディスカッションのスキルを育成することに重点においている。最終学年の4年次に学生が履修する英語コミュニケーション IV は、3年間で身につけた実践的な英語力で、ディベートやディスカッションにおいて英語で発信できる力に焦点を当て、卒業研究発表では1分間の英語によるプレゼンテーションが学生に義務付けられている。

2.1 開学前の取り組み

実践的英語コミュニケーション力の涵養のため

[†] 大阪国際工科専門職大学, 大阪

Faculty of Technology, International Professional University of Technology in Osaka, 3-3-1 Umeda, Kita-ku, Osaka-shi, Osaka, 530-0001 Japan

a) E-mail: lee.choonmi@iput.ac.jp

には、一般に、4つの技能（リスニング力・スピーキング力・リーディング力・ライティング力）をバランスよく育成することが望ましく、そのためには、自律的で継続的な英語学習習慣の確立に必要とされるeラーニングの提供を含め、同一学期中に、それぞれの技能に特化した英語科目が展開され、少なくとも2年間にわたる英語学習時間の量的保証は必要である。本学は、情報系専門職大学でありながら、上述したように英語科目を4年間にわたり学生に英語学習を義務付けていることから伺えるように、英語教育に重点を置いている。

しかしながら、大学の創設時に文部科学省に提出された英語科目のシラバスに記載された科目到達目標が、選択された教科書が設定する目標と現実的には合致しないという問題点が、大きな障害としてまず立ちふさがった。加えて、本学で学ぶ学生は、英語力育成を主たる目標としているのではなく、情報工学とデジタル・エンタテインメントを専攻分野とする理系学生である。

そのため、理系専攻の学生を自律的な英語学習者にするという目標を設定し、シラバスが設定した到達目標に合致するよう、指定された教科書の利用法と、本学が学生に提供する英語補講授業の在り方を考えることから開始した。

初年度は、非常勤講師を確保できなかったため、英語専任教員2人で、クラスサイズ40名の英語授業を担当せざるをえなくなった。しかも、英語スキルの必要性を将来の職業選択のために強く意識していなかったためと思われるが、一部英語能力の抜きんでた上級・中級レベルの学生は別として、半数以上の学生の英語レベルは、初級であり、後述するように、特にリスニング能力に至っては、大多数の9割の学生が初級レベルであることがわかった。

1年次から2年次前期までは、週2回の英語授業が学生に課せられているものの、学生の基礎学力を上げるために、授業外でも英語学習に時間をかける必要があった。そのため、シラバスに記載されている目標に基づき、各年度の授業内容を以下のように設定した。

- 1年次は、基本的な英語コミュニケーション

能力、特にスピーキングとリスニングのスキル、そして語彙の増強をはかる。

- 2年次は、アカデミックな分野におけるリスニングやディスカッションのスキルなど、より専門的な学習内容に移行する。本学のシラバスにおいては残念ながら、リーディング力があまり重要視されていないため、Graded Readersのような多読・速読教材の活用が必要とされる。
- 3年次は、プレゼンテーション力や、将来のキャリアに必要となるディスカッション力などの、より専門的なスキルに重点を置く。
- 4年次は、卒業研究発表において、人を引き付ける英語によるプレゼンテーション力の強化に重点を置く。

2.2 初年度の英語教育

以下は、初年度の取り組みを簡潔に報告したものである。

(a) 授業で使用する教科書の精査

本学の英語シラバスを見直した結果、リスニング力とスピーキング力の育成という到達目標が指定教科書の目標と必ずしも合致していないことと、学生の英語レベルを鑑み、Conversations in Class, 3rd Edition（アルマ出版）を通年使用の教科書として利用することにした。

この教科書により、学生は、まず、語彙と表現レベルから学び、モデルとなる基本構文を繰り返し練習する。学生が自然に英語を話すことができるような段階的訓練によって、基本的な英会話力の育成が期待される。さらに、自律的な英語学習の習慣の確立に役立つよう、シラバス指定の教科書の一部を、学習管理システムOpen LMSを活用した、授業外学習として整備し、本学が保証する苦手科目の補講に代替する機能も持たせた。

(b) eラーニングの整備__ WordEngine

本学では4年間の英語学習を義務付けているが、他学で導入されているeラーニングが整っていないという問題点があった。そのため、英語を不得手とする学生に共通するのが語彙力の欠如であることに着目し、初年度は、自ら英語を学習するという習慣づけのためにも、eラーニングの整

備は本学において必要であると考え、WordEngineの導入を大学に求めた。

WordEngineは、学生のレベルに応じて、頻繁に利用される語彙力を身につけることが可能なウェブベースのソフトウェアであり、パソコンやスマホなど身近なツールを活かして、場所と時間を選ばずに学習することが可能である。学生には、毎日10分程度の継続的語学学習を指導することとした。

(c) 自学習用読書教材の整備__ Graded Readers

一般的に言われるように、学生の全般的な英語力の最も効果的で効率的な方法の一つが、英語の本を多く読むことである。Graded Readersは、学生のレベルに応じた英語力の育成と読書習慣の確立を目指した教材で、多くの大学が図書館の蔵書に取り入れ、学生に読むことを奨励している。本学の初年度においても、語彙力に応じたレベル別の本を読む習慣を学生に身につけさせることが重要と考え、電子版 Graded Readers の購入を申請した。残念ながら、同時アクセスが可能ではなく、また初年度購入できた冊数も少ないので、将来的には、Xreadingなどのオンライン教材が適切になるであろうと考えている。

(d) レベル別クラス分け

プレースメントテストの実施により、1つのクラスを上級クラスとし、残る3つを通常クラスと設定したが、上述のような非常勤講師不足のため、1人の英語教員が担当するクラスサイズは最大40名となり、上級クラスはわずかに少ない36名でスタートせざるをえなかった。

授業は極力英語によって行うことを目標として始まった。英語ネイティブ教員が担当する上級クラスでは、すべて英語で授業を行うものの、英語初級レベルが多くを占める通常クラスにおいてはやや困難であろうことが予想された。考えられる原因として、英語による簡単な指示の聞き取りや、英語による基本的な質疑応答にも自信がないという学生の英語レベルが挙げられるが、情報工学あるいはデジタル・エンタテインメントを専攻分野とする学生の英語学習に対する関心の欠如も見逃せない原因であった。そのため、通常クラスにお

いては、英語と日本語の両方で行うことも可とした。

(e) 学生とのインタラクティブな交流

残念ながら、本学には学生と教員が憩うことができるラーニング・スペースがない。通常、英語ネイティブと交流を深めるための、ランチタイム・ミーティングなどの場を設けて、英語を積極的に学びたいという学生たちの支援を行ってきた経験を有する英語教員も、本学の施設上の制限、そして、2019年末に発生した新型コロナウイルス感染症対策によるソーシャルディスタンスの必要性は、予想外の問題となった。しかしながら、英語力を伸ばしたいという個々の学生の要望に丁寧に応え、学生の個別性に応じた指導、英語による歓談、交流に努めるとともに、長期休み期間中には英語プログラムを企画するなどした。

2.3 2年度の英語教育

リスニング力とスピーキング力に特化した1年間の学びによって、学生が実践的な英語コミュニケーションにやや自信をつけた後、学生は、アカデミックなリスニングやディスカッションのスキルなど、より専門的なトピックの学習を2年次に進むことになっている。開学から本学における英語教育をともに進めてきた英語ネイティブの退職にともない、2年次に導入を予定していたXreadingの利用は一旦保留としたものの、シラバスに規定された教科書が語彙レベルと基礎的リスニング用のテキストであったため、これを補完する補助教材が必要となった。

初年度に購入した Graded Readers の総冊数と閲覧形式が、学生数に見合っていなかったため、教科書のトピックに沿ったリーディング教材の作成と、同じくリスニング用の動画教材などを作成した。これらの補助教材を用いて、学期中2回実施されるスピーキング・テストでは、学習したトピックについて、学生がグループ・ワークによる調査と議論、発表ができることを目指した。

上級クラスにおいては、動画教材とリーディング教材の併用が可能であり、さらに学習スピードは順当なものであったが、通常クラスには、動画教材のみでトピックを学習することが多かった。しかしながら、通常クラスにおいても、前期2回

のスピーキング・テストにおいては、テンプレートの英語発表ではない、オリジナルな発表ができたことは指導した英語教員として誇らしく思うことである。

後期は、学生が臨地実務実習にでるため、前期の英語学習時間の半分となる15回の授業回数となったが、興味深い社会問題のトピックについて、テンプレートな議論の展開を学んだあと、前期と同じようにグループ・ワークでディスカッションに取り組み、最終的な成果として、1分間のスピーチと質疑応答を含むプレゼンテーションを行った。4年次の卒業研究発表における1分間スピーチが1年次の時には非現実的に思えた学生も、順当な学習プロセスを経れば決して困難な課題ではないことを認識するとともに、これから改善すべき点も把握できたのではないかとと思われる。

2.4 TOEIC® オンラインテストの結果からの考察

英語授業を展開するにあたって、学生の英語力の把握とレベル別のクラス展開は必要なことであった。そのため、新入生の英語学力レベルをCASECテスト(Computerized Assessment System for English Communication)ではかった。CASEC [1]は、個人の能力に合わせてテスト問題を変化させていく適応型テスト形式で、従来のペーパーテストに比べて短時間で、正確な測定が可能な英語コ

ミュニケーション能力判定テストである。「語彙の知識」、「表現の知識」、「リスニングでの大意把握力」、「具体情報の聞き取り能力」の4つのセクションから出題され、各250点配点で、1000点を満点とする。

新入生の平均点は359.6点で、6つあるレベルの中で一番低いEレベル、すなわち挨拶や紹介などごく初歩的な応答などが可能な初学者レベルであり、表1に明らかなように、60.7%の学生がEレベルと診断された。各セクションにおける新入生の英語レベルは表2の通りである。

本学学生の語彙知識は決して乏しいわけではないが、実践的な英語コミュニケーションに必要な語彙の活用と、おそらく文法的知識も弱いがために、短い英文の聞き取りはできても、英文がより長くなると聞き取りが難しくなっているのではないかと推測された。

そこで、CASECはホームページ上で、外国語の

表1 CASECテスト結果
Table 1 CASEC Test Results

CASECレベル	スコア 範囲	人数	%
AA	880~1000	1	0.7
A	760~879	0	0.0
B	600~759	4	2.6
C	450~599	27	17.6
D	390~449	28	18.3
E	0~389	93	60.7

表2 CASECテスト詳細
Table 2 CASEC Test Results_Details

レベル	スコア 範囲	Section 1		Section 2		Section 3		Section 4	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
AA/A	186~ 250	1	0.7	2	1.3	1	0.7	1	0.7
B	151~ 185	5	3.3	5	3.3	7	4.6	1	0.7
C	116~ 150	38	24.8	22	14.4	33	21.6	24	15.7
D	96~ 115	39	25.5	38	24.8	35	22.9	35	22.9
E	0~ 95	70	45.8	86	56.2	77	50.3	92	60.1

表3 CASECスコアとCEFRレベル目安の対応表
Table 3 Correlation Table: CASEC scores and the CEFR levels

CEFR	Section 1	人数	%	Section 2	人数	%	Section 3	人数	%
B2~	195-250	1	0.7	225-250	1	0.7	225-250	1	0.7
B1	145-194	8	5.2	165-224	2	1.3	200-224	0	0.0
A2	75-144	96	62.7	85-164	85	55.6	145-199	11	7.2
~ A1	0-74	48	31.4	0-84	65	42.5	0-144	141	92.2

運用能力を同一の基準で測るための国際基準である「ヨーロッパ言語共通参照枠」CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) [2] とのスコア対応表 [3] を公開しているため、それに基づき、参考までに本学学生の英語レベルを国際基準から見直してみた。結果は表3の通りである。

語彙知識と表現知識のCEFRレベルがA1、すなわち、英語学習における初学者に該当する学生は31.4%と42.5%であるのに対し、実に92.2%の学生のリスニングレベルがA1に該当することが判明した。そのため、本学における英語学習は、リスニングレベルの向上を主たる目的として、リスニング力とスピーキング力に特化した実践的英語教育とする基本方針が定まったのである。

入学後の1年間の間に、前期終了時点でTOEIC® L&Rテストの受験を学生に推奨したが、これは義務ではなかったため、受験者は全体の55%にとどまり、1年間の英語到達度をはかることは難しいという問題が認められた。そのため、2年次前期末に、授業時間内において、TOEIC® L&Rテストの受験を義務づけた。

一般に、TOEIC® L&Rテスト400点未満は英語による意思疎通が難しいとされる英語学習における初学者レベル、400～500点台は基本的な英会話が可能になってくるレベルとされる。参考までに、企業が採用時の参考にするスコアである500～600点は、限定された範囲内で英語を用いた業務上のコミュニケーションができるレベルである。

受験率は79%に上昇したものの、授業出席率に厳しい本学の状況からこの受験率をみると、低いと言わざるを得ない。原因としては、TOEIC®などの英語資格試験による重要性を未だ認識できていないため、あるいは、英語に対する学習意欲が低いために、テストを煩わしいとして回避したのではないと思われる。表4は、1年次から2年次までに実施したTOEIC® L&Rテストの平均点である。参考までに、CASECスコアに参考値として記されたTOEIC®換算点の平均点も記している。T1は2021年度本学学生が受験したTOEIC®テストを、T2は2022年度受験した

表4 TOEIC® L&R テスト平均点
Table 4 TOEIC® L&R Test Average Scores

実施年	テスト種別	受験率	平均点	65名の平均
2021.4	CASEC (C/T)	98%	359.6 [289.7]	389.7 [320.2]
2021	TOEIC®_1(T1)	55%	323.1	329.2
2022	TOEIC®_2(T2)	79%	314.1	352.5

* []はTOEIC®換算点数を表す

TOEIC®テストを指す。

これら3つのテストをすべて受験した70名(2022年度2年生総数に対して48.6%)を対象とし、受験日の体調不良、日頃の授業態度などを参考にして、2021年度スコアより100点以上のマイナスの学生5名を除いた65名(全体数に対して45.1%)を抽出した。表5は、100点ごとにTOEIC®スコアをグループ分けし、各スコアの人数を集計したものである。

併せて、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が公開しているTOEIC®各種テストのスコアとCEFRの相関関係を表した対照表[4]を表6に記す。65名のみを抽出した平均点に関しては、前出の表4を参照されたい。

平均点は、320.2点(C/T)から、329.2点(T1)、そして、352.5点(T2)と順調に増加しているものの、2021年4月のCASECテストによるTOEIC®変換スコアでは、53.8%にあたる35名が、100点から300点までのCEFRのA1-A2レベル、すなわち英語初級者レベルであった。2021年度は37名、2022年度は34名と近似値を示しているものの、初級レベル者の緩やかな減少が認め

表5 65名のTOEIC®L&Rテストスコア分布
Table 5 TOEIC® L&R Test Scores

	C/T	T1	T2
0-100	0	0	0
100-200	11	16	9
200-300	24	21	25
300-400	19	11	11
400-500	5	7	9
500-600	3	6	4
600-700	2	1	4
700-800	0	1	2
800-900	0	1	0
900-1000	1	1	1

表6 TOEIC®各テストスコアとCEFRとの対照表
Table 6 Correlation Table: TOEIC® Program Test Scores and CEFR

CEFRレベル*	TOEIC L&R		TOEIC S&W		TOEIC Bridge L&R		TOEIC Bridge S&W	
	Listening	Reading	Speaking	Writing	Listening	Reading	Speaking	Writing
Proficient User C1	490~	455~	180~	180~				
Independent User B2	400~	385~	160~	150~				
B1	275~	275~	120~	120~	39~	45~	43~	43~
Basic User A2	110~	115~	90~	70~	26~	34~	37~	32~
A1	60~	60~	50~	30~	16~	19~	23~	20~

られる。また、300点から400点までの推移をみると、19名(C/T)、11名(T1)、11名(T2)と下げ止まっているうえに、表5から一見して明らかかなように、400点が本学の学生を2分する大きな境界線をなしている。

一方で、リスニング力とスピーキング力に重点をおいた本学の英語教育が良い結果を結んだと言えるのが、2つのスコア層である。1つは、400点から500点までのA2上層レベル(5名, 7名, 9名)であり、もう1つは、600点から700点までのB1レベル(2名, 1名, 4名)である。600点から700点までの高いスコアを獲得した学生がすべて上級クラスに所属する、比較的英語レベルの高い学生であったのに対し、400点から500点までのスコアを獲得した学生の中には、通常クラスに所属する、入学当初は初級レベルだった学生も含まれている。実践的英語力に特化した英語授業の提供は、スコアアップの重要な要因の1つであるが、スコアを伸ばした学生の学習態度を概観すると、自律的で継続的な英語学習を確立していることも、英語力を伸ばす重要な要因となっていることは疑いようがない。

3. むすび

結論から言うと、リスニング力とスピーキング力の実践的英語力に焦点を絞った本学における2年間の英語教育は概ね成功と言える。しかし、100点から300点までの初級レベルが多くを占める本学の現状において、そもそも英語学習意欲の低い学生に、英語学習の重要性を認識させ、自律

性と継続性を備えた英語学習者へ育成していくべきか、言い換えるならば、大多数を占める英語初級レベルの学生の英語力をいかに底上げしていくべきか、それが2023年度の課題と言えよう。

謝辞

2022年3月末をもって退職された本学工科学部情報工学科准教授アラン・J・ベセット先生の、長年の英語教育に対する貢献に敬意を表するとともに、先生のご協力とご助言に感謝申し上げます。

文 献

- [1] CASEC
<https://casec.evidus.com/materials/>
- [2] CEFR Global scale - Table 1 (CEFR 3.3): Common Reference levels
<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/table-1-cefr-3.3-common-reference-levels-global-scale>
- [3] CASECスコアとCEFRレベル目安の対応表
<https://casec.evidus.com/materials/>
ただし、セクション4は問題の形式上CEFRとの対応は難しいと判断し、現段階では対応づけられていないことが注記されている。
- [4] TOEIC® Program 各テストスコアとCEFRとの対照表
https://www.iibc-global.org/toeic/official_data/toeic_cefr.html



李 春美

大阪女子大学 大学院文学研究科修士課程 英語学英米文学専攻 修了。文学修士。広島女学院大学にて博士(文学)取得。短期大学や大学にて、長年英語教育に従事。大阪大学大学院医学系研究科国際・未来医療学講座「医療通訳」養成コース(日本語・英語)にて医療通訳を学び、通訳案内士(英語)の資格も取得。英国ルネサンス期の劇作家シェイクスピアの歴史劇を専門として、著書に『エリザベス女王最後の十年間・シェイクスピアのイングランド歴史劇からの考察』、『英語の成長と構造』(翻訳・共訳)(以上、英宝社)等。日本英文学会、日本シェイクスピア協会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本医学英語教育学会会員。



この記事は Creative Commons 4.0 に基づきライセンスされます
(<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)。